

明帝国の成立、太祖洪武帝

14世紀は全地球的に異常気象で、寒冷化したヨーロッパではペストが流行、東アジアでも飢饉が続いた。

大元ウルスは【1: 】で実質滅亡した。

- 1) 明の太祖【2: 】しゅげんしょう=洪武帝は、**貧農の出身**で白蓮教の極貧僧だった。1352年、紅巾軍に参加、一兵士だったが郭子興軍かくしこうぐんで頭角を現し、1366年、紅巾軍指導者の韓林児かんりんじを殺害して、華中・華南を平定した。1368年、【2】は占領した金陵（今日の南京）で帝位につき、国号を「【3: 】」とさだめ、元を北方に追い払った（以降「北元」と呼ばれる）。これが、太祖【4: 】位1368-98である。光武帝と混同しないこと！
- 2) 1368年、【4】は金陵（今日の南京）を首都と定めた時に、これを**応天府**おうてんふと改名した。

明は、江南こうなんから発展して中国を統一した唯一の王朝である！ 覚えておこう。

南京の呼称のここまでの変遷 ①**秣陵**まつりょう：秦の都邑。始皇帝が命名。②**建業**けんぎょう：(三国の)呉の都。孫権の命名。③**建康**けんこう：東晋の都。以降、南朝の共通の都で呼称も同じ。

戦国時代、呉を征服した楚がこの地の「王氣」を沈めるため黄金を埋めたという故事から、金陵きんりょうという古名を持つ。楚が始皇帝に征服され、始皇帝がこの地に巡幸した際、「この地に王者の気がある」と言われ、激怒して金から秣まぐさの秣陵に改名した。

- 4) 太祖洪武帝（朱元璋）の業績

①【5: 】いっせいいちげんのせい 皇帝一代に一元号、元号=皇帝の名とする。

洪武帝は元号を「洪武」で一貫させた。皇帝の在位中は元号を変えないこの制度は清朝まで受け継がれた。

②行政機構の整備 1380年、**中書省**、**丞相**（中書省の長官）を**廃止**、**皇帝独裁による中央集権**をめざした。

行政機関である六部（りくぶ）は皇帝直轄。監察機関として**都察院**、軍事統帥機関として**都督府**あるいは五軍都督府を置き、これらも皇帝直属とした。

09G

永楽帝の時に**内閣大学士**を置いた。（主席内閣大学士は実質的に宰相である。）

なお、洪武帝は、息子たちを全国に王として配置するなどモンゴルのなことも行っている。

地方行政は、**三司**に行わせた。布政使司（地方行政官庁）、按察使司（司法）、都指揮使司（軍事）

それぞれの長が 布政使ふせいし、按察使あぜち、都指揮使 01W

③律令の整備 【6: ・ 】みんりつ・みんれいを制定=大明律令

④軍制を確立 人びとを軍戸・民戸に分け、軍戸は世襲の將校・軍人を出し、**衛所**に配置された。

【7: 】えいしよせい とは軍戸百戸所(112人)を基礎単位に、千戸所が5つ集まって1衛とする制度。

なお、軍戸は世襲。工部の管轄する匠戸（手工業）も世襲。

⑤地主らを里長りちょう、一般農民を甲首こうしゅに任命し**徴税**と治安維持に当たらせた。

これを【8: 】りこうせいという。これは宋の隣保制度を発展させた村落行政組織である。

民戸110戸を1里とし、110戸の内裕福な10戸を**里長戸**とし、残り100戸を10甲に分け、各甲に**甲首戸**を置いた。1里長（1年交替で選ばれた）と10甲首に、賦役黄冊の作成と**徴税**、中央への献上品の調達、村の治安維持の責任を負わせた。徴税の前提として整備したのは以下の2つ。《頻出》

i) 租税・戸籍台帳=【9: 】ふえきこうさつ

ii) 土地台帳=【10: 】ぎょりんずさつ 写真による出題に備え資料集を見ておこう！

*④⑤はモンゴルの千戸制を継承しつつ中国の農村社会に基盤を置くものであったとされる。

⑥白蓮教を邪教として弾圧した。

⑦朱子学を官学とし、官僚は**科挙**で登用した。庶民には家族や郷村の秩序を守るべきとする儒教的な訓戒である【11:】

りくゆを定め（1397年発布）、読み聴かせを徹底した。

⑧1371年、【12: 】かいきんせいさくをとった。民間人の貿易と海外渡航を禁じ、外交関係を朝貢・冊封関係にある国々に限定し、「朝貢貿易」のみを行う。洪武帝が海禁政策をとった理由は、i) 14世紀後半東シナ海を跳梁した**前期倭寇**の略奪を阻止する。ii) 自由な国際交易のもたらす国内経済の混乱を避ける。

成祖永楽帝（位1402-24）

- 1) 第2代皇帝、**建文帝**けんぶんてい 位1398-1402は洪武帝の孫。諸王の弱体化をはかって領地没収を強行したため、叔父の燕王**朱棣**えんおうしゅてい 洪武帝の第4子【13: 】せいなんのえき 1399-1402を起こし、南京を占拠。建文帝はこの時行方不明となった。「君側の奸を除き、帝室の難を靖んず」が語源。「靖難の変」とも言う。

- 2) 燕王朱棣は、応天府（現在の南京にあった都）を占拠し、1402年、成祖【14: 】えいらくてい 位1402-24として即位した。このように永楽帝は、甥から帝位を奪ったのである。

- 3) 永楽帝の業績

①1421年、**都**を北平に移し、ここを【15: 】と改名。旧都の応天府を【16: 】と改名した。

紫禁城を造営した。大運河を修復して華北と江南を結びつけた。

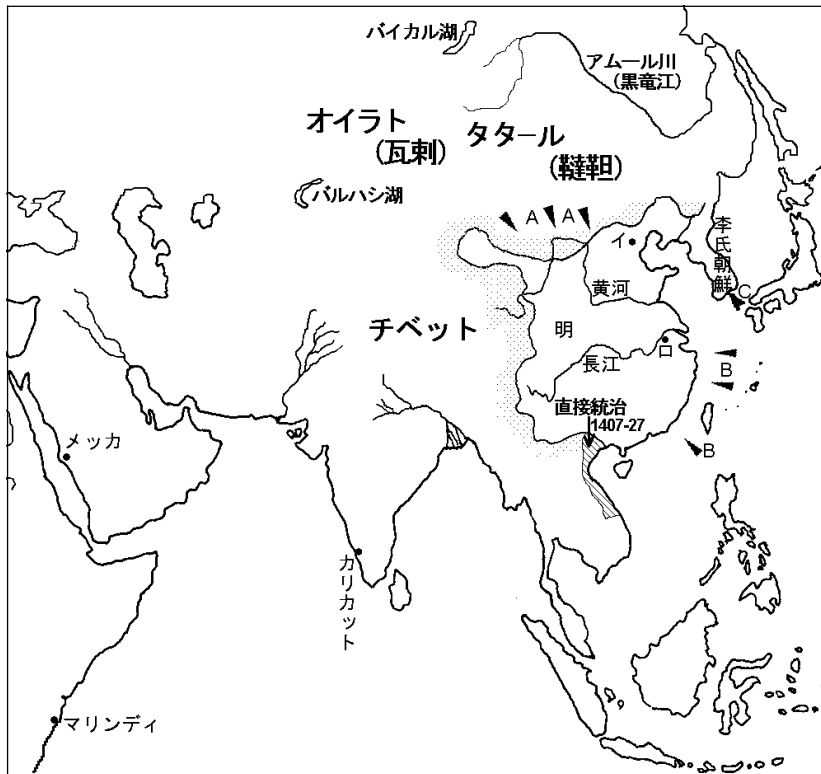
②行政長官として【17: 】ないかくだいがくしを置いた。主席内閣大学士は実質的に宰相。

③【18: 】かんがんを重く用いた。これは後に重大な問題になる。

④万里の長城を改修・連結した。その後、土木の変（1449年）以降、更に整備され、現在見るような姿になった。

⑤東北地方に進出、女真人を従えた。【19: 】には自ら5回も遠征し1410-24、1、2回目はオイラト、韃靼（韃靼）に打撃を与えたが、3回目以降は成果なし。5回目の遠征帰途に永楽帝死亡。後掲4)記事参照。

⑥ヴェトナムにも遠征。13世紀のフビライの3度もの侵攻を撃退した陳朝大越国は、1400年、外戚に国を奪われ滅亡した。陳朝の滅亡に乗じて永楽帝は一時（1407～27年）、ヴェトナム中部まで占領、併合した。



⑦宦官の【20: 】ていわ 1371-1434? に行
 わせた【21: 】なんかいえんせ
 い 1405-33 は、東南アジア諸国に朝貢を促すた
 めであったとされている。南海遠征は全部で
 7回。1～6回は永楽帝、7回目だけ宣徳帝
 である。遠征はインド洋はもちろん、分遣隊
 はアフリカ東岸のマリンディに達し、メッカ
 も訪問した。俗説によると、永楽帝は建文帝
 が海外に逃れ、再起のチャンスをおねらってい
 るのではないかと考え、世界中から建文帝を
 探しだして殺せと命じたとも言われている。
 朝貢国の一つであるマラッカ王国 14C末-1511
 と鄭和との関係についてはNo.29参照。
 実際にインド洋沿岸諸国からの朝貢は促進さ
 れ、南海貿易は活発化した。また、多くの情
 報が得られたことから、この遠征は中国人の
 東南アジア進出のきっかけとなった。
 献上されたキリンの絵が残る。象も。
 スペイン・ポルトガルによる大航海時代の開
 幕より、約半世紀以上も前に、鄭和艦隊が大
 航海を行っていたことは特筆に値する。
 以上は成祖永楽帝の業績
 ≪作業≫鄭和の南海遠征の航路を左図に示せ。

4) 洪武帝に大都を奪われモンゴル高原に退いた元朝の残存勢力(北元1371-88)は洪武帝の更なる攻撃で2代で滅亡(1388年)、明の北方は一時沈静化した。この時(1388年)フビライ家の直系は断絶し※、他のチンギス家の王族がハーン位を継承したが弱体だった。そのため、かつてモンゴル帝国を構成したモンゴル系の諸部族は、チンギス家のハーンを盟主とする韃靼(だったん タタール)とオイラトの長を盟主とするオイラト(瓦剌 わら)に分かれて再結集し、明の脅威となった(北虜)。
 ※ トグス=テムル=ハーンは明軍の奇襲を受け敗走中にアrikブケ(フビライとハーン位を争って敗れた)の子孫にあたるイエスデルの手によって殺害され、フビライの王統は断絶した。

韃靼とオイラト

1) 2) はNo.80で詳述。

- 1) **韃靼** 北元以外の、元朝滅亡後モンゴル高原東方に逃れたモンゴル系部族を韃靼(タタール)と呼ぶ。チンギス家王族が盟主。北元滅亡後は明側からの呼称は「韃靼」。彼ら自身は「モンゴル」と自称していた。
 なお、シベリア方面のトルコ・モンゴル系遊牧民(ロシア、ヨーロッパでは「タタール」と呼ぶ)はこの人々とは別の民族である。また、「韃靼人の踊り」は、ロシアの作曲家ボロディンが作曲したオペラ『イーゴリ公』の第2幕の曲で、諸君も聴いたことがあるだろうが、この「韃靼人」も明朝北方の韃靼とは別の民族(ポロヴェツ人)である。
- 2) **オイラト** 北西モンゴル(地図参照)を拠点とするチンギス家系ではないモンゴル系部族。オイラトの長を盟主とする。元来テュルク系であるとする説もある。明側からの呼称は「瓦剌」(わら)。
- 3) 永楽帝の死後、モンゴル高原の韃靼、オイラトは勢力を回復し、明を圧迫した。これが【22: 】ほくりよ!これに対して南倭とは沿岸部を荒らした前期倭寇(14世紀)・後期倭寇(16世紀)の跳梁を指す。従って「北虜南倭」という用語は、14世紀に限らず16世紀にも使用する。

前期倭寇・14世紀

- 1) 前期倭寇とは、14世紀における、主として【23: 】による洋上襲撃、朝鮮・中国沿岸に対する略奪行為。国際交易を担ってきた海商、武士団など自立した日本人集団が行ったが、朝鮮、中国の商人や貧しい沿岸住民も加わって、衰退期にあった諸国(元、高麗、鎌倉幕府)はほとんど対応不能だった。
 ≪背景≫宋・元代の東シナ海では既に海上交易が発展していた。ところが、14世紀に当事国である元 1271-1368、高麗 918-1392、鎌倉幕府 1180/83-1333 がほぼ同時期に衰退し、洋上は無統制の状態となった。
- 2) 明 1368-1644 が成立すると、【24: 】は力で倭寇(前期倭寇)を抑え込む政策に打って出た。
 - ①民間の海上交易自体を禁止、民間人の海外渡航も禁止。大型船の建造や漁業活動まで制限した。
 - ②国交も明と朝貢・冊封関係にある国家に限定。それらの国家とのみ「朝貢貿易」を行う。
 上記①を【25: 】と呼ぶ。②も併せて厳しい通交管理体制ないしは制限貿易体制が実施され、実質上「鎖国」に近い状態となった。①と②を一括して海禁政策と呼ぶ表現もある。
 洪武帝がこのような政策を行った目的は次の通りである。
 (i)倭寇による襲撃、略奪、密貿易を阻止すること。(ii)中東やインド産の綿布、香辛料の輸入により、通貨(銀、銅銭)が不足し経済が混乱するのを防止すること。

清 1616-1912 は初期、康熙帝治下で明の遺臣鄭成功の抵抗を阻止するため、1661年に遷界令を出し厳しい海禁をおこなったが鄭氏平定後に解除(1684)。乾隆帝は1757年、貿易港を広州1港に絞り、取引も公行コホンの特権商人に限定するという海禁を実施した。これはアヘン戦争後の南京条約(1842)で解除された。